

観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海 (聖典一三七頁)

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(聖典四九〇頁)

『浄土論』に曰わく、「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」とのたまえり。この文のころは、仏の本願力を観ずるに、もうおうてむなしくすぐるひとなし。よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむとのたまえり。「観」は、願力をころにうかべみるともうす、またしるというころなり。「遇」は、もうあうという。もうあうともうすは本願力を信ずるなり。「無」は、なしという。「空」は、むなしくという。「過」は、すぐるといふ。「者」は、ひとといふ。むなしくすぐるひとなしというは、信心あらんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり。

(聖典五四三頁)

第5組 彰信寺住職

## 遇無空過者

竹内 順導

Text by Jundo Takeuchi

「浄土真宗における救いとは何か」というこの表題を目にして、色々な事柄・内容がある中で、先ず最初に思い当たるのは、おそらく他の宗教・仏教には見当たらないであろう「遇無空過者」という事であります。殆どの宗教・仏教は苦悩の内容・原因等を取りあげ、神や仏の力によりその苦悩から解放され幸福へと導くような説き方をしているのが中心のように思われます。それは又、過去・現在を否定して未来志向的傾向が強く感じられる事でもあります。

しかし、どれだけいわゆる“幸福”になれたとしてもそれは永続するはずもなく、新たな不安や特に幸せのメッキがはげた空しさは覆うべくもない心根として潜在し続けるのではありませんか。そして、その空しさは古今東西・老若男女全ての人間が持っている深い心の問題であると思います。そして、多くの人間はその事に気付きながらもどうする事も出来ず、身の回りの生活にのみ心身を委ねる日々を生きているように思えます。正に流転を流転と気付く事なく

空しく過ぎる人生であります。

某氏は「長生きをしても喜ばず、富に恵まれても心貧しく、酒場に行っても旅行しても心の底から楽しめず…。しかし、それは欲張りや贅沢だからじゃない、本当の満足を求めている事に出遇わないからだ。本願に出遇わないからだ。言い換えれば、満足しないのは、如来の本願から自分に対する促しがはたらいっているからだ。」というような内容を教示して下さっています。仏教における救いが多々ある中で、天親は『浄土論』に

観仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功德大宝海

と記述され、宗祖は和讃に

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

といただかれ、「一念多念文意」にもさらに、この『浄土論』を引用し、深く拝受なされたことであります。人生、何と云っても「空しく過ぎる事」くらい、悲惨な事は無いという事を強く示して下さいなのだと思います。そして、宗祖はこの『浄土論』を注釈された曇鸞の『浄土論註』をさらにいただき、

天親菩薩のみことをも

鸞師ときのべたまわずは

他力広大威徳の

心行いかでかさとりまし

と、天親・曇鸞を深く讃嘆され、自らの名を“親鸞”と称せられたお心を思う時、何とも感慨深いものがあります。

さて、因みに御門徒の葬儀には、私も宗祖の御和讃「本願力にあいぬれば…」と唱和しているのですが、儀式に流れて無感覚に過ぎてしまいがちであります。そして、口称念仏を申せども現在只今にはたらいっている如来のお心に気が付かず、流れ過ぎているのが常の私であります。しかしながら、たまにハッとこの金言に頭を叩かれる時があります。その事に気付かされた時、どんなに厳しい苦悩の真っ只中でも、その事を決して無駄にさせない、そして、空しく終わらせないという如来のお心を感じて、現実の今を生き抜く事の大切さ・重さ・尊さを知らされる事があります。